

第一編 新たに生まれる真理

神は宇宙に満つる靈的光である

話はルールドの奇跡の中心人物であったベルナデットに還るのであるが、この少女は学問の乏しい下賤の者で、村の人からもバカにされていたような農家の娘であったのに、何故聖母マリヤがこの娘を選んで神姿をあらわされたのだろうか。

この問題に関して、アメリカの作家のアデラ・ロージャー女史が、ある日、アディントン氏を訪問して話している時、彼女がある修道院の神父にこの疑問をぶつけて、たずねたときの話がでた。その神父は、「ノー、ノー、あなたの考えは間違っています。聖母マリヤはベルナデットに神姿をあらわされたわけではありません。ベルナデットが聖母マリヤを見たんです」といつて答えたので大いに啓発されたとロージャー女史は語って、それを語るとき如何にも感動したように目を輝かしたという話が載っているのである。

神は普遍的存在であって、特に無学の賤しい少女ベルナデットを愛して姿をあらわし給うたのではない。神は太陽の光のように普遍的に充ち満ちてい給う。それをどんな姿で見るかは自分の「心の窓」の形によるのである。全然窓のない暗室の中にいたり、窓はあっても、「心の窓」を閉ざしておれば、太陽光線が戸外一ぱいに満ちていてさえも、その人は暗黒の中に住んでいるのである。そんな人は神が自分の前にい

ましても見ることはできない。われわれは、「心の窓」を開かなければならない。新たに生まれるとは「心の窓」をひらいて神を見ることである。しかも、「自分の内に」神を見ることである。

神の肖像たる人間は完全である

神は人間を、神の肖像として創造せられたということが「創世記」には書かれているのである。肖像というのは、実物を「次元」の異なる世界に具体化したものである。

神は超次元又は無限次元の世界にまします超越的普遍存在なのである。それを、「縦横厚み」の三次元の空間と、更に「時間」という次元を加えて四次元の立体肖像として、この地上に創造又は創作せられたのが人間なのである。神は創造の巨匠であるから、その創作せられたる立体肖像たる「人間」は寸分の誤差も無く、最も完全に神そのまゝの姿に表現されているのである。それ故に、人間は神そのままに完全であり、美であり、健康であるのである。そして神は人間をも含めてその創造りたるすべてのものを見給うて「全て善し」と宣言せられたのである（創世記第一章）それ故に本当の人間には「悪」あることなく、欠点あることなく実に完全そのまゝの存在なのである。それ故、病氣や老衰や不幸や災難や欠乏や不調和などが自分に起こるなどとは決して考えるな。

「今」の一瞬を悔いなく生きよ

人間は神の肖像として、神が永遠の生命を持ち給う如く、人間もまた神の表現身として永遠の生命を持続するのである。

しかし神の生命は無限次元又は超次元の世界に在^ましますから超次的に永遠の生命をもち給うが、人間は三次元空間に、時間の流れの中に、その永遠の生命を限られるカンバスの上に表現するのであるから、時々刻々の生活に「永遠の生命」を表現する生き方をするほかに、神の生命の肖像としての「永遠の生命」を地上に現すことは出来ないのである。それゆえにダラリと懶^{なま}けた生活をしながら、長生きしたところが、永遠の生命を地上に表現することは出来ないのである。「神の生命の永遠性は、時々刻々瞬間の生活の中に「今」即「永遠の生活を生きる」ことによってのみ、地上に於いて神の「永遠の生命」を「神の子」として生きることが出来るのである。

されば神は宜^のり給うのである――

「今」の一瞬一刻を悔いなく生きよ。「今」の一瞬のなかに汝の無量寿の生命はある。かくして汝は地上生活に割当てられたる汝の生命の一周期は終わり、他の天体に生まれ変わるか、再び地上に、異なる環境に、異なる体験を通して自己の魂を磨くための、生まれ変わって出るかするのである。汝は「神の子」であるから、地上の生死を超えて永遠に生きるのである。この「今」の一瞬を悔いなく生きよ。」と。今の一瞬を悔いなく生きる者は、常に自己の生命を新生せしめつつあるのである。

新たに生まれるということ

人間は五感の感覚によって自己を視て、自己を「肉体」と称する有限の物質体であると認める。これを「創世記」に於

いては「蛇の知恵によって瞞^{だま}される」という風に象徴的に記述しているのである。蛇は地（物質）に匍匐^{ほふく}して触覚的に物に触れて解するから、すべての存在を物質的なものとして見る肉体人間の知覚の表象となるのである。

旧約聖書の「エゼキエル書」には預言者エゼキエルに神があらわれて「死すべき者の死に就いて我之を悦ばす。それ故に視域^{しいき}を変えて永遠なるものを見よ」と啓示していられるのである。これはイエスが「死にたる者は、死にたる者に葬^{ほうむ}らせよ」と言っているのと同じ意義であるのである。人間は「死すべき肉体」という面と、永遠に滅びざる「霊なる自己」（神の子なるもの）との二つの面をもつのである。五感の感覚による認識は人間の虚^{こへ}仮不実肉体の面のみを見るのである。しかし悟りは、人間の滅^{ほろ}びざる「霊なる自己」を観^みるのである。この視域の転換が所謂^{いわゆる}「新たに生まれる」である。肉体自我より霊的自我への転換である。

人間の二つの面、あなたはどちらに振り向くか

現象世界は表現の世界である。神の想念の表現の世界の上に、人間自身の想念の表現がその上に覆^{おほ}いて、二重に映し出される世界である。それ故に、人間の「心の振り向き」が、「肉体の死すべき面」に振り向くか、そうでなしに、永遠に滅びざる「神の子」の霊的存在面に振り向くか、この両者の相異によって、時々刻々の「生命^{いのち}の表現」にも非常な差を生じて来るのである。より多く「肉体の、死すべき面」に振り向く者は、自己本来の不滅の生命を表現し得ないが故に、常に活力乏しく、虚弱であり、色々の肉体病の遺伝学説に惑わ

され、自己の想念の表象たる色々の特色ある病氣に悩まされるに至るのである。

第二編 神想觀の神髓

神は今此処にあり給う

神の国は今此処にある。そして神は自己に於いて顕現している。神は余所にあるのではない、「爾の内にある。」それを見出さないで今此処を物質の国土と觀、人間を單なる物質の塊だとする、其処に迷いがある。その迷いを取去らなければ、人間は自縛自縛されている。人間は物質でない、肉体ではない。この身このままに靈的實在である神を見出さねばならない。人間は肉体でない、靈的實在である。この事實を深く心に自覺せしめるための行事が神想觀である。神を頭腦で知っただけでは、神が、「わがもの」とはならないのである。全心身をもつて神の實在を体感体得しなければならぬ。それをなすのが神想觀である。神想觀を必ず怠らず行ぜよ。

聖なる追求とその彷徨

こうして人類の神への聖なる追求と、神をたずねる聖なる巡礼とがはじまる。或る人は神を「仏」の名に於いて仏教で見出す。ある人は神を「慈悲」の名に於いて慈善的な行為や隣人への愛行に於いて見出す。或る人は、神を教会に於いて見出し、教会の礼拝の中に神と自己との接点を見出そうとする。しかし教会や寺院での神や仏は、それを教える牧師や僧侶の排他的な、縄張りの狭い心でゆがめられ、本当の神

を見失われ、「その教会や寺院を去ったならば、神罰や仏罰で恐るべき災禍に見舞われる」などとおどされて、神を求めたがゆえに、却つて神に縛られて自由を失うような結果になり勝ちである。併し本当の神は決してそのような神罰や仏罰で人間を威したりする方ではないのである。それは神を求める道に迷つて何時の間にか、「外」に神を求めていたからである。

病氣や貧乏をなくするには

「若しこの病を癒やし給うたならば神の存在を信じます」と言つたり、「若しこの貧しさをすくいたまうたならば神の存在を信じます」と言つたりする人があるけれども、神は病氣治しても、貧乏直してもないのである。「神に於いては病氣が無い」のであり、「神に於いては貧乏がない」のである。ほんの一寸した考えの違いのようだけれども、この二つの考えには千里の開きがあるのである。前者は病氣の存在や貧乏の存在をみとめるけれども、後者に於いては病氣や貧乏の存在をみとめないのである。私たちに必要なのは「病のない神」を、そして「貧乏のない神」を自己の内に目覺めしめることだけである。「暗」をつかんで抛げ出すのではなく、「暗」のない光を照り輝かしさえすれば、「暗」は消えるのである。それと同じく神の光（自覺）を輝かしさえすれば、病氣も貧乏も消えるのである。

第三編 天地に満つる吾が生命

各人の性格はこのようにして形成せられる

毎日あなたの心の中に起こしている個々のアイディアは小なるものであるにしても、それが毎日発想せられて重積して来るならば、小なる卵子が受精によって分裂して生じたところの小さな細胞がついに四百兆ないし一千兆も積み重ねられて、複雑精巧なる人体を構成するのと同じように、それら日常発想されたアイディアは系統だてられて一つの人格の属性（又は心の傾向）となるのである。それがあなたの性格を形成することになるのである。善良なる、そして逞（たく）ましく、愛深く、思慮深い性格を自分が持ちたいと思うならば、毎日あなた自身が心に描く想念が、どんな小さな問題に關することであつても、善に一致し、愛深く、思い遣（おも）りある物の考え方によつて、日常生活を送って行くがよいのである。日常生活に於ける行為は、“心に想う”という行為をも含めて、ことごとく宇宙のビデオテープに印象貯蔵せられ、それが“精神的生命体”を組織して、その人自身の性格を形成するに至るのである。

小善を毎日積む功德について

どんな小善でも毎日必ず怠（おこた）らず実行するがよい。どんな親切行いでも、自分の出来ることで人のために成ると思えることは必ず実行するがよい。それがあなたという人間を通して神が働いていられるのである。つまり、あなたが神の働きの通路になるのであるから、あなた自身が浄化され、あなた

の魂が高められるのである。同時に“善”の業（カルマ）が蓄積されて、それが偉大なる善事を将来に為す原動力となるのである。

あなたが自身が永遠者である

『光明道中記』の一節に「お前自身が永遠者である」という一章がる。すべての人間の実相は「永遠者」であり、既に完全なるものであるが、その実相が覆（お）い隠されているのである。それを覆い隠しているところのものは、人間を肉体と称する物質的存在だと見る五官の感覚による認識である。この認識がもたになつて、普通の人間は、物質的なものを自分のところへ引き寄せ、それが多くなるほど、自分が偉大になり幸福になるかの如く錯覚する。そして物質的な欲望と、その欲望の結果とを積み重ねて、愈々益々自分の尊貴な靈的実相を隠（いん）覆（ふく）しようとするのである。外に自分が偉大になる資料を得ようと想つて、外に求めれば求めるほど、内部の靈的実相は覆いかくされてしまふのである。本当に偉大な存在は自分自身の内にあるのである。

人格の向上について

現象界は、その“永遠なる者”がそれを隠（いん）覆（ふく）しているところの“物質”という幻影の隙間（すきま）から、顔を出すための修行場だということができるのである。自分が永遠者でありながら、“そうでない”と思うのは「創世記」にあらわれて来た“サタンなる蛇”の唯物論の「知恵の樹の果」を食したという神話が象徴している五感の感覚にだまされているのである。われわれは、五感の感覚が作り出した「物質」という“幻のヴェール”で自分自身の実相を覆い隠しているのである。そ

のヴェールをわれわれは修行によって少しずつ破つて孔^{あな}をあける。そして少しずつ、より多く完全なる“神の子”の実相を現象界に顕^{あらわ}すのである。

肉体という個我の壁を破つて少しずつ実相を現出する隙間をひろくあける修行が、「自分のため」という利己を忘れて、愛他的な、他のためになる善行を行うことである。これによって個我をとじ込めていた殻が徐々にやぶれて実相の完全さが、少しずつより多く現象界に顕現することになるのである。それをその人の魂の進歩といい、人格の向上というのである。

第四編 神は詩を以て真理を告げ給う

自分の魂に燈が点れば周囲が明るくなる

まずあなたの家庭を光明化することから学ぶがよい。家庭は最も手近にある魂の道場なのである。もしあなたの家庭の雰囲気^{ふんいき}が充分明るく幸福でないならば、まず真理を先に知ったあなたから、自分自身を変革なさるがよい。あなたの周囲の状態は、あなたの心の態度、生活のあり方を反映するのである。一個の電燈がとぼつたら、その電燈の周囲は明るくなるのである。その電燈の燭光^{しよくこう}の明るさにしたがって極僅^{ごくわずか}かしかその周囲を照らさない小さな電燈もあるけれども、その燭光の大なるものほど遠い距離まで照らすのである。最初は人類全体を照らすような大なる光となることはできないにしても、自分の家庭を照らす光となることは、さほど難しいことではないのである。先ず御自分が周囲を照らす光となることが必要である。自分の魂に燈がともれば周囲が明るくな

るのは当然である。

第五編 “実相の人間”と“仮相の人間” その関係

人間の体は肉体だけではない

ここでもう少し詳しく人間の体(body)の説明をしたいと思ひます。人間の体には五種あるのであります。本体、霊体、幽体、エーテル体、肉体であります。

我々の生命の“本体”は神様の生命が天降^{あまくだ}つて来たもので、神様の生命はどういう寸法とか、どういう広がりとかいうような面積や、体積を超越しているので、図解に於いては仮に“点”を打って現わし、この点を、神様の大生命の噴出口——生命力が噴き出す出口——と見ればよろしい。

その生命がそういうふう^{ちようど}に、丁度水面に石を投じたらその石の落下した“点”がエネルギーの“中心”であつて、その中心に過去・現在・未来のすべてがある。その中心から波紋^{もん}を生じて拡がって行くように、生命の波動が拡がって行くに従つて、この振幅すなわち波の幅が段々拡がって行きまして、そして周囲に行くほど速度のゆるやかな振動になつて参りまして、中心に近い程激しく敏速に振動しているというわけであります。

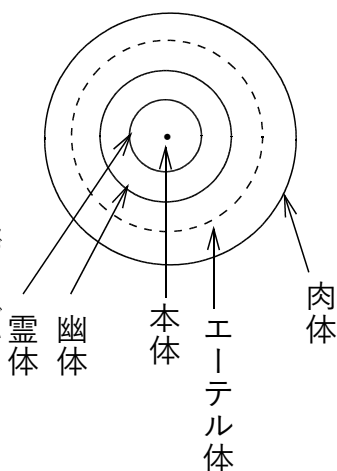
本体の中に全てがある、本体が実相である

この神様の^{みはつ}大生命の噴出口、此処に生命の本体ががる。時間・空間未発の本体であるが、やがて展開するすべてのアイ

ディアが包含^{ほうがん}されている。これが実相である。

その生命の振動が拡がって、一番中心に近い、従って振動数が非常に高く、運動及び感覚が鋭敏であり、生命力が活発であり、神通自在^{しんつうじざい}である。これが霊体^{れい}(spiritual body)という所であります。

その周囲に、少しこれよりもゆるやかに振動しているという“体^{たい}”がありまして、これは幽体^{ゆう}(astral body)というのであります。そしてこの周囲にある点線で表現されているのがエーテル体^{etheric body}であります。そして一番周囲のこの“体”は肉体で最も振動数が低く鈍^{どん}重^{じゆう}なので物質化して見えるのであります。この中心に近い霊体^{れい}程振動数が高く、



活動が激しく、神通自在^{しんつうじざい}であり、段々周囲に行くに従って神通力が衰えて、一番外側の肉体は単に神経中枢から来る司令を感受することによって動いている五官的存在でしかないのでありますが、この奥の“体”皆色々の靈感とか、第六感とかいうのを持っているのであります。

霊体及び幽体について

霊体は叡智^{えい}の体——優れた、“叡智の体”であり、この優れたる智慧及び普遍的な愛がこの体を座^{seat}として活動しているわけであります。

幽体は少しこの勝^{すぐ}れたる智慧がやや振動数が衰え、鈍重になって、そして愛も普遍的なものより、少々劣^やっている私的な愛情が幽体を座として活動しているのであります。執念とか妄執^{もうしやく}とか、魂魄^{こんぱく}この世に留^{とど}まって、怨^{うら}みをはらすなどの感情は、この幽体を機関として活動します。時には幽霊現象となつてあらわれることがあります。

地球のエーテル体と原子爆発の影響について

次の“エーテル体”というのは、この幽体と肉体とを繋いでいる接着剤みたいな働きをしているのであります。それと同時に、感情の座である幽体からの感情爆発の激しい噴出を抑制し調整する働きをしているのがこのエーテル体であります。

地球等の天体も物質的塊^{かたまり}の様に物理学的に見れば見えますけれども、やはり生命体であつて、人体と同じ構造をもっているのであります。例えば、強力な破壊力をもつ原子爆弾・水素爆弾等を用いますと、地球の表面の地殻^{ちかく}(これは地球の表皮のようなもの)が破壊すると共に、このエーテル体が破壊されまして内部の感情体である幽体の一部が破壊し、腹が立つとか、憎いとか、悲しいとかの感情の噴出を抑制する役目のエーテル体が破壊される為にその裂け目から内部に沸騰する憤懣^{ふんまん}の激情——激しい感情——の噴出が抑制調整される

ことなく外部に暴発されるということになって来るのであります。

最近、地球上の、今迄地震が起らなかった地方にしばしば大地震が起って来つつあるのは、水素爆弾・原子爆弾が空中又は地下に於いて原子力の実験と称して継続して行われているようなことで、地球のエーテル体が所々で破壊されてしまっているから、その爆発を制御する力が衰え、地球の内部感情の爆発が容易に地表にあらわれ、その振動が大地震となるということになっているのであります。だから原子力の実験は地下爆発と雖も、絶対やらないことにして頂きたいのであります。

第十編 “神” を更^{あらた}めて観直す

「祈る心」と「念仏申す心」

神と人間との接触は、霊と霊との接触であって、「神」と「肉体人間」又は、「神」と「物質人間」との接触ではないのである。だから「肉体人間」が病気で苦しんでいようと、災難に遭^あおうと、どんな姿で苦しんでいようと、「肉体人間」同士が争って戦争しようと、それは神の救いの圏外にあるのである。だから「神が本当にあるなら、何故人類がこんなに苦しんでいるのに救^{たす}けないのか」といって無神論に陥^{おち}る人が出て来るのも無理はないのである。神は霊であるから、神は無限の救いの霊波を放送していられるけれども、人間の霊的部分の、^{しか}而も波長の合う部分にだけ感応^{かんおう}するのであるから、特に霊的に波長を合わせた人だけが、神の霊波に感応して救いを受け

ることになるのである。祈りや念仏は、それによって神仏が動かされて、特別「祈る人」や「念仏する人」だけに恩恵を与え給うというのではないのである。「祈り」や「念仏」によって動かされるのは、「祈る人」や「念仏する人」自身の心が動かされて「祈る心」や「念仏申す心」になって、神仏のお救いを感じ得るようになるのである。

神想観を繰り返して「自覚」

神想観を実修する度毎^{たびごと}に、その観の深^{しん}浅^{せん}の程度に従って、私たちは次第に人間は「物質的肉体」そのものでないことを知り始めるのである。そして次第に時間、空間の制約を超える存在であることを知り、自己の生命は暦の年齢によって老衰せず、如何なる外部的状态によっても破壊されざる金剛^{こんごう}不壊^{ふえ}の存在であることを知るのである。涅槃^{ねはん}経^{きやう}に釈尊が説いていられるように「月に没^{もつ}性^{しやう}なく、月に盈^{えい}欠^{けつ}なきが如く、人間は歿^{もつ}性^{しやう}なく盈^{えい}欠^{けつ}なき存在である」ことを知るに至るのである。

私たちは自己の運命の主人公である

人間が、自己を単なる肉体的存在とみとめ、肉体の意識によって生活している限りに於いて、彼が健康であったり、病弱であったり、運が良かったり、運が悪かったりするのとは、それは偶然のめぐり合わせであって、彼自身に責任がないかのように見えるのである。しかしながら現象世界が、実は、「生活する人」自身の“心の状態の顕^{あらわ}われ”であることを知るとき、その人は自分の心を支配することを通して、病気をはじ

めとして人生の諸問題を自己の欲する方向に変化することができるのである。毎日々々の我々自身の起こす想念が、将来起こる我々自身の運命の原形を形成しつつあるのである。私たちは「想念」の種子^{たね}を蒔^まいて、それが現象としてあらわれたのを自己の運命として穫^とりつつあるのである。

祈りの方法及び意義について

神は無限の善であり、無限に完全なる智慧であり、無限に完全なる生命であり、無限に完全なる供給であり、無限に完全なる調和であり、一切^{いっさい}処^{しょ}に充^みち満^みちていられる偏在者であるならば、その神は各人の内にも偏在してい給うことは明らかであるのである。神の恵みは偏在して既に各人の内にあるのに、殊^{ことさら}更に祈り求めなければならぬというのは何故であろうか？ 神の恵みは喩^{たと}えばラジオの放送電波のように、何処にも、空間いたるところに充ちているのである。しかし放送はあり、電波は自分の体の中までも達しているのに、それでもそれを受信し得ない人があるのは何故だろうか。自分のラジオ・セットを放送電波に波長を合わせないからである。それと同じく、神は既にあらゆる恵みを偏在的に放送しているのに私たちが霊的に波長を合わせないときは、それを受信することができないのである。祈りは、自分の心のひびきを調律して神に波長を合わせる方法であり、神に懇^{こん}請^{せい}、懇願して、神を説得する方法ではないのである。だから既に与えられている恵みに感謝の念を起こす神想観が最も正しい祈りである。

問題を処理するまでに、神に心を振り向けよ

自分にとって都合の悪い問題が起こって来たときには、それと直ちに取り組んで勝負を決することをしないで、先ずその問題を神にあずけて、自分の心の表面の動揺を取り除き、自己に宿る神の叡智を自分の心の深層から浮かび上がらせてくるようにして、その智慧の判断によって事を処理すれば、最も適切な処置がほどこされることになるのである。時として『甘露の法雨』のような真理の詩を朗読することによって自分の恐怖や動揺が消え去って、最もよき解決の方法が思い浮かぶことがあるものである。

現象にあらわれた問題が悪化して行くのは、概^{おおよ}ね、その問題に直面する人間自身の恐怖心や動揺の念が現象に反映した結果であることが多いのである。